

# さんむのふるさと散歩

No.5



伊藤左千夫

## 茶人 伊藤左千夫

伊藤左千夫はどんな人だろうと思いつくと、「野菊の墓」の作者、正岡子規門下の一人である『馬酔木』や『アララギ』を刊行した人として、小説家・歌人と答える方が多いのではないのでしょうか。

では、今回は、視点を交えて、茶人としての左千夫をご紹介します。

師である正岡子規から「お茶博士」と称され、愛用の茶道具は、現在資料館が所蔵し、一部は展示されています。

また、資料館の敷地には、茶室「唯真閣」があります。

## 茶室「唯真閣」

明治43年5月、茶室「唯真閣」は完成しました。土台、柱、梁および桁には杉が使われています。

この杉材を提供したのは、旧陸岡村(山武地区)の蔵真一郎(蔵真)です。現在、伊藤左千夫生家前に建っていますが、当初は、東京本所茅場町の家にあつたものを、左千夫の死後、甥の伊藤芬氏により昭和16年



唯真閣



欄間

に移築され、現在に至ります。もし、移築されていなかったら、空襲に遭い、焼失していたかもしれませんね。

## 美しく実用的な茶室

水屋と点前畳の境の欄間には、大小の雉が2羽向かい合つて仲睦まじく、枝(松といわれる)にとまっています。

鳥は、羽の部分が紺色、腹部が赤色、葉は緑色と、約100年という歳月を経たとは思えないほどの色彩を、今な

お放つていることに驚かされます。

美しい欄間から、右斜め下をみると、持仏堂があります。点前をする者にとっては、真正面に位置します。

一見、色鮮やかな彫刻が施されたこの欄間は、「わび」「さび」の心に重きを置く茶道の真髄に反するように思われます。しかし、持仏堂や使所も設置されていることから茶室だけでなく、書斎を兼ねていたと考えられます。

なお、11月5日(日)は茶人伊藤左千夫を顕彰して、「錦風茶会」を開催します。

茶会では、普段入室することができない唯真閣で、お茶を飲むことができます。一服しながら、欄間の彫刻など目を向けてみてはいかがでしょうか。

また、歴史民俗資料館2階常設展示室では、左千夫愛用の茶道具・書簡などを展示。1階企画展示室では、企画展「左千夫の同人・門人」を開催しています。

\*市内在住の方の入館料は無料です。